

二〇二三年度

頌栄女子学院中学校

入学試験問題（第一回）

受 験 番 号

国 語

《配 点》

一〇〇点

《試験時間》

四〇分

《注 意 事 項》

- 一 合図があるまで、これを開いてはいけません。
- 二 問題は17ページの冊子になっています。答えはすべて解答用紙に記入して下さい。解答用紙は一枚で、この中に折りこまれています。最初によく確認し、ぬけているものがあつたら、手をあげて申し出て下さい。
- 三 試験が始まったら、解答用紙の左にある欄かんに、氏名と受験番号（算用数字で）を、正しく記入して下さい。受験番号は、問題表紙にも記入して下さい。
- 四 解答用紙の＊印の欄には、何も記入しないで下さい。

※字数指定のある問いでは、特にことわりのない限り、句読点等の符号も一字分と数えます。

□ 次のA～Eの各文中のカタカナを、漢字に直してていねいに書きなさい。

A 彼女のコウセキを皆でほめたたえた。

B 神社ブツカクの所在を地図に記した。

C バンシユウの風景を目に焼きつける。

D キンムが終わったらすぐに家に帰る。

E 常用のイグスリを買ってきてほしい。

□ 次の文章は、巧みな話術で小話を観客に聞かせる漫談家である徳川夢声（一八九四年～一九七一年）が書いた文章の一部です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

（問題文中の※は、終わりに注があります。また、問題文中の「」は上の語や語句の意味を説明しています。問題文の表記を一部書き改めてあります。）

ハナシにとって、コトバを並べることは絶対条件であるが、そのハナシに生命を与えるのは、今まで述べきった「お話ししてきた」、いろいろの条件が必要です。そしてその生命を潑刺として元氣あらしむる「生き生きとして元氣にさせる」ためには、も一つ肝腎な条件が潜んでいるのです。

ハナシというものは、喋るものですが、そのハナシの中に、喋らない部分がある。これを「間」という。こいつが、実は何よりも大切なもので、食物にたとえていうと、ビタミンみたいなものですが、直接、ハナシのカロリーにはならないまでも、このビタミンM（「間」のこと）が欠けては、栄養失調になります。

「そんなことは、わかってるよ。ベラベラとヒツキリなしに喋らないで、ときどき、言葉を休んで合間を造ることだろう。」とおっしゃいましたね。左様（その通り）、それも私のいう「マ」の一種であります。

中のもっとも初歩のものでして、喋り疲れたらだれだって、呼吸を休めますからね、そんなことを言ってるんじゃないです。ただ生理的に無神経に、言葉と言葉との区切れをつけるのでなく、張りつめた神経を鋭敏に働かして、リーダーの如く、正確無比に適不適（適当か不適当か）を計るところの「沈黙の時間」なのです。

かつて、放送局で琴の名人今井慶松師に会ったとき、師は、私の放送「宮本武蔵」を毎回聞いている、と言われた。同様のことを他の人たちからも私は言われたことがあります、その人々の「実に面白い」とか「大いに愉快だ」とかいう顔つきと、今井師の顔つきが違っているのであります。そこで私は、少し異様に感じたので、あの種の物語は好きですか、という意味のことをたずねた。すると、

「あれを伺っておりますと、気合の勉強になります。」

と、意外の答えを得た。私はちよつと呆氣にとられた形だったが、次の瞬間ハタと膝をうつ思いで、この名人の心構えに感服した次第です。

この場合「気合」と申しても、武蔵がエイッ！と叫んだとか、小次郎がトオッ！と叫んだとかいう、あの気合ではありません。

この「気合」はすなわち「マ」の意味だったのであります。すなわち、今井師はこの一つの物語放送から、自分の芸術に必要なものを、研究していたわけです。

なんだか、手前■（自分で自分のことをほめること）のようで恐縮ではありますが、大変面白い話だと思うので、ありのままを申しました。これを、私でなくだれか他の人の話に変えて、とも思いましたが、かえって小細工はいけないと思ったので、自慢話のようなことになりました。なアに、実は今井師の方では、

ムセイ君の物語を聞いていると、マを外すのは、どういふ場合かと、たくさん実例がわかるんでね。それで勉強になるんですよ。

てなふうに考えているのかもしれませんが、いやまったく。そうすると、私は、とんだ恥を天下にさらしているわけです。ハッハッハ。

ハナシに限らず、芸術と名がつくものには、音楽はもとより、美術、彫刻、文学、演劇、みな「マ」が、重要な位置を占めています。目立たない、目に見えない重要な位置をです。

日本画を例にとってみますと、ここに一幅の（一つの）名画がある。尺五（横幅三十五センチメートル）四十五センチメートルの長さの紙に、赤い唐辛子が二本描いてある——それつきりで、あとは画家のサインと印があるだけ、なんにも書いてない白紙です。せつかく、まだたくさん書くところがあるのに、もったいない話だ、などと思ったら落第です。それが名作である以上、その空白も一杯に詰まっています、一点の加筆もゆるさないはずであります。同時に、その二本の唐辛子が、上下左右、どちらに一分一厘動いても、画面全体の調子がくずれるはずでです。

B 唐辛子と、広い空白とが、動きのとれない調和・バランスを保っているからであります。ハナシで申すと、唐辛子やサインや印が喋っている部分、空白が喋らない部分であります。すなわち、この空白が「マ」なのであります。

「じゃア、ベタ一面に描いてある、西洋の名画は、マがないじゃないか？」

という疑問が生まれようね。なるほど油絵具は隅から隅まで塗ってあります。何か描いてもあります。しかし、焦点はちやんと定まっています、日本画の空白に比すべきところは、画面のいたるところに置いてあります。バランスが、みごとに

れています。「マ」がちやんとあります。

彫刻も然りです。乳房のふくらみを、美しく表わすためには、その周囲に「マ」の役をつとめてる部分が、必ずあるわけです。それなくしては、乳房が彫刻家の想う通りに、ふくらみません。

こう考えて参りますと、「マ」とは「沈黙」なり、では誤解を生ずるかもしれません。

——「マ」とは 虚実のバランスなり。

こう申すと、また別の「マ」の面が、おわかりかと存じます。

※²久保田万太郎氏は、

※³「忠臣蔵の四段目は、マの芝居ですよ」

と言われたが、あの長時間の幕に、台辞は非常に少ない。判官（都の取り締まりを行う役職にある、この芝居の主人公）が切腹するというだけで、一幕のほとんど全部が済んでしまう。かりにこれを上手な役者がやると、あの長い時間を、満場水をうつたる如くもたせるが、■役者（演技の下手な役者）だと、その半分の時間しかもたない、その上客は大ダレとなる。

芝居ですから、沈黙していても、いろいろ表情動作がある。この表情動作に、やはり虚実のバランスがあるわけです。

高座（舞台）に落語家が出てきました。彼は、高座に姿を現わし、中央まで歩いて、座蒲団にすわり、お辞儀をしました。ただこれだけで、この落語家は巧いか、拙いか見物にはわかってしまっています。たったそれだけの動作、あるかないかの表情、その中にバランスの破れたところがあつたら、これはもう拙いに決まっています。一人二人では鈍感な客も、大勢そろ

うと一種の連鎖反応が起こるでしょう。群集心理というものは、恐ろしい「勘」をもつものです。

ですから、ハナシをする場合、コトバだけの研究では足りません。そのコトバにもたせる「マ」の研究、話している間の表情動作すべてにわたるバランスの研究、そこまで行かないと満点とはいえません。

C、その研究はどうするんだ？

答えは平凡です。たくさん経験をつむこと、絶えずその心構えでいること、これです。

「何か『マ』の簡単にわかる ■の巻（問題を解決するひけつ）はないかい？」

だって？ そんなものはありませんよ。何しろカンの問題ですからネ。

カンといえば、この勘を側面から説明する一つの例があります。「勘」の問題で、同時に「間」の問題ですが、ここに野球の名外野手（野球で外野を守る名選手）がいるとします。打者がカーンと打って、いや洒落ではありませんゾ、カーンと打って大フライ（高く上がった球）になりました。そのとき、この名外野手は飛んでくる球なんか始めから見えていません。カーンときたとたんに、彼の鋭いカンで、いきなり後ろ向きになって走ります。走って走って走り止んだと同時に、グロ―ブを高くあげて、みごとこの大フライを受け止めました。

⑤ 大喝采！

カーンと鳴って、発止と（しつかりと）受けるまでの時間を、つまり「マ」をすな、この選手は彼のカンで計っていたわけです。D、その正確さに対する、観衆の快感が、喝采となったわけです。

ハナシの場合でも、この「マ」が正確であるとき、聴衆は快感を味わい、陶醉（うっとりすること）の境地にまで入るのであります。いいかえれば、バランスに対する快感です。

断っておきますが、バランスがとれてるということは、動かないでいることではありません。空港でジェット機が飛び立つのを見て、

「やア、綺麗だなア！」

と思わず、あなたは叫ぶでしょう。あの型、あの輝き、あの速力、これらのバランスにわれわれは酔わされたのです。

「話術」とは「術」なり。

「」とは動きて破れざるバランスなり。

（徳川 夢声 著『話術』より）

※1 宮本武蔵

……江戸時代初期の剣術家。十三歳から二十九歳までの間に六十回あまり勝負をして一度も負

けなかったという武勇伝が残っている。同じ剣術家の佐々木小次郎と戦った巖流島の戦いは特に有名。

※2 久保田万太郎

……明治から昭和の時代にかけての小説家・劇作家・俳人。

※3 忠臣蔵の四段目

……江戸時代の人気芝居の一つ。四段目は特に有名で、役者の実力が試される重要な場面。

問一

A

D

に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア では

イ そして

ウ また

エ しかし

オ たとえば

カ つまり

問二

I～IIIの■には、ひらがなが一字ずつ入ります。続くへにある意味を参考にして、あてはまる言葉を答えなさい。

問三 次の文を、文章中にもどすとするとどこに入ればよいでしょうか。もどすか所の直前の五字を抜き出して答えなさい。（句読点は含まない）

要するにいわゆる「マ」がもたないのです。

問四

①「これを『間』という」とありますが、ここでの「間」とはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一言もしやべらないタイミングを考えながら、休める時間をつくること。

イ 勢いよく話したり、ゆっくりと話したりすることでバランスを取ること。

ウ その場の空気を読みながら、話すべき時間と黙るべき時間を設けること。

エ 常に元氣よく話すため、呼吸を整えながら落ち着いて言葉を発すること。

問五 ————— ②「自慢話のようなことになりました」とありますが、なぜですか。その理由の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今井師は、私が元気な声で「マ」を取りながら「宮本武蔵」を話していることをほめてくれたから。
イ 今井師は、私の「マ」の取り方を聞いてそのタイミングを自分の演奏に活かそうと学んでいたから。
ウ 今井師は、私が「マ」を外しながら話していることが自分の勉強になっていると言ってくれたから。
エ 今井師は、私の「宮本武蔵」に対して、顔つきが変わってしまったほど真剣に聞いてくれたから。

問六 ————— ③「虚実のバランスなり」とありますが、ここでの「虚実」とは「ものがそこにあることとないこと」という意味です。文章中の日本画の例ではどのようなことを言っているのでしょうか。「バランス」という言葉を使わないで二十五字以内で説明しなさい。

問七 ————— ④「群集心理というものは、恐ろしい『勘』をもつもの」とありますが、どのようなことに「勘」が働くのでしょうか。「目の前の落語家」という言葉を必ず使って三十字以内で説明しなさい。

問八 ————— ⑤「大喝采」とは、「感心して声をあげてほめたたえる」という意味ですが、なぜ観衆はこのような行動をするのでしょうか。その理由を説明したものととして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 名外野手が、最初から最後までいつさい球を見ずに大フライを受け止めたから。
イ 名外野手が、彼の鋭いカンで時間を計ってみごとに大フライを受け止めたから。
ウ 名外野手が、鋭いカンだけで走る方向と時間を決め大フライを受け止めたから。
エ 名外野手が、打球のカーンという音だけをたよりに大フライを受け止めたから。

問九 筆者は落語に精通していたため、文章中にはくすつと笑えるような表現や言い回しが各所に見られます。そのうちの一つである「術」は、二重に意味が取れるように表現している言葉です。 （二つあります）に入る最も適当な語を本文中から抜き出して答えなさい。

問十 【作文問題】

文章中では「バランス」という言葉が多く使われています。あなたが普段の生活で考えている「バランス」には、どのようなものがありますか。また、それをどのように心がけていますか。実際の経験や具体例をあげ、作文して答えて下さい。解答は大きく濃くていいねいな文字で、必ず解答欄内に収まるように書いて下さい。評価は、表記もふくめた言葉としての正しさ、また、巧みさにも着目しながら、文章として完結しているもののみ、内容を中心に行います。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(問題文中の※は、終わりに注があります。問題文の表記を一部書き改めてあります。)

照子(「私」)は四月から高校一年生になるはずだったが、浪費家の親が破産して突然夜逃げをしてしまい、自分は母親の遠い親戚だという久代さんの元に預けられてしまった。希望の高校に進学することもできず、全く知らない佐々良という町に住まざるを得なくなった照子は、これからどうなるのかもわからない日々を送っていた。佐々良では、おっとりとして心優しいサヤさんとその息子のユウ坊など、いろいろな人との出会いがあったが、なかなか素直に心を開くことができずにいた。

次の場面は、あるときサヤさんを自分の部屋に連れてきた場面である。

二階の、狭苦しい四畳半だ。その隅にしつらえられた^{※1}違い棚に、サヤさんは手を伸ばした。
「まあ、綺麗ね」

彼女の少し荒れた指の先には、ガラスのリンゴがあった。

本物の^{※2}吹きガラスのリンゴだ。たぶん私の持ち物の中では最も高価な品物。東京のデパートで見かけて、欲しくて欲しくてお小遣いとお年玉を貯めてようやく買ったリンゴ。

お母さんは……このリンゴを見て、そして値段を聞いて[□]で笑っていた。あの人は間違ひなく浪費家だけど、自分が価値を認めないものに関しては何となく冷淡だ。身を飾ることもできなければ、何か実際の役に立つわけでもないのに、何だつてこの子は……そんな目をして、私とリンゴとを見ていた。

だけど……。なんにもない。殺風景な今のこの部屋の中で。このガラスのリンゴだけが唯一の装飾品だった。何の役にも立たないけど、だけどたったひとつの美しいもの。ずしりと重くて冷たくて、掌で包んでいると少しずつ私の体温を吸い取り、そしてぬくもつてくるもの……。

「触らないで」

私は体当たりをするようにサヤさんに駆け寄った。驚いたサヤさんはバランスを崩し、その手の先がリンゴに触れ……。

あつと思ったときには、ガラスのリンゴは違い棚の下の段にぶつかり、物入れの角に当たり……。粉々に砕け散ったりはしなかった。^①そうだったのはむしろ、私の心だ。

サヤさんがオロオロとリンゴを拾い上げた。あちこち欠け、無数の細かい亀裂の走ったリンゴは、まるで蜘蛛が住み着いて瞬く間に巣を織り上げたような有様だ。

「ごめんなさい、照ちゃん。私……」

サヤさんが必死な面もちで謝ろうとするのを終いまで聞きもせず、私はまたしても、久代さんの家を飛び出したのだった。

(中略。少しして家に戻ってきた照子をサヤさんはどこかへ連れていこうとする)

延々三十分ほど歩かされ、ようやく着いたのは何だか汚らしい工場みたいところだった。すすけたような建物、山裾の森の中にぼつんと建っている。サヤさんも初めて来たらしく、しばらくもじもじしていたが、やがて意を決したように中に入っていた。^②曇りガラスのドアは開け放しになっている。

内部にはむうつと熱が籠っていた。入ってすぐのところには棚があり、ガラスのグラスや^{※3}一輪挿しみたいな物がたくさん並んでいる。

「吹きガラスの工房なのよ。調べてみたら、佐々良にもあったの」

それが何? と言いかけて気づいた。サヤさんはあのガラスのリンゴのことを気にしているのだ。

部屋の奥に、小さな炉が据え付けられている。その前で、一人の老人が作業をしていた。

炉からは炎が勢いよく燃える音と、凄まじい熱とがあふれ出していた。熱気が、圧力を持ってぐいと身体を押してくる感じがする。

おじいさんは長い鉄パイプを炉から取り出した。先端には、赤くところけるガラス玉が付いていた。傍らの金属製の平台に、色のついた粉末があり、溶けたガラス玉はその上でくると回転した。ちようどお団子に黄粉をまぶすような按配である。ガラス玉はふたたび炉の中であぶられる。おじいさんのこめかみや背中には、汗がじつとり湧き出し、流れ落ちている。おじいさんには私たちの存在はまるで目に入らないようだった。サヤさんは邪魔にならないようにだろう、ユウ坊を連れ

てずっと外に出ていった。私は一人、魅入られたようにおじいさんの手許を見つめている。

鉄パイプの手許側から、ぷつと息を吹き込むと、赤い玉は重たげにゆっくりと膨れた。ガラスはまるで、水飴みたいに扱いにくく、そして自在だ。とろけたガラスを台の上で転がし、ヘラでちよいと押さえているうちに、ぐねぐねの玉はまるで魔法のようにガラスの形を取り始めた。

私は息をひそめて、その形の変化を見守っている。

やがてガラスは完成し、バーナーで底の部分があぶられた。そのまま奥のごつい機械の中に入れられる。

「その機械は何ですか？」

好奇心から、思わず尋ねていた。

おじいさんは今初めて私の存在に気づいたというように振り返り、素っ気なく「ジョレイロ」と答えた。だが耳で聞いただけではわからないと気づいたのか、A 言い直した。「徐冷炉。徐々に冷やす炉、だよ。急激に冷えると割れが出るから。この中に入れても、割れるときは割れるがね」

説明し終えて、「で？」と言うようにこちらを見やった。

「吹きガラスって、私にもできるようになりますか？」

なぜか、そんなことを尋ねていた。炉の熱さで、私の額にも汗が伝い落ちていく。

「無理だね」とおじいさんは II にべもない。そうですね、と私は肩を落とす。すると相手は「ただし」と付け加えた。「十年やれば、できるようになるかもしれない」

「十年、ですか」

私は吐息をついた。長いのだろう、その年月は。けれど今から十年後、私は二十五歳だ。まだ、二十五歳。人生はその先もずっと続く。

傍らの完成品が並ぶ棚を、あらためて眺めた。縁に赤や青の入ったワイングラス。全体に淡いグリーンピアグラス。リースのように細かい亀裂模様の入ったシャンパングラス。小さくてキュートな箸置き。口元がフリルみたいに波打った、レトロな金魚鉢。

皆、人が手でこしらえたとはとても思えないほど、美しい品々だ。芸術品とは違う、日用品の美がここにある。ほんの少

し贅沢で、きらびやかで、透き通っていて。そして、B 張り詰めている。それが、水飴みたいな熱い塊から形作られる不思議。いくら眺めていても、興味は尽きない。

こんな作品を、作れるようになっていくかもしれない十年後。

それは、あるかもしれない未来の一パターンだ。

傍らに、割れたガラスの入った箱があった。色別にきちんと分けてある。それとは別に、市販のワインボトルと思しき瓶の入った箱もある。きれいに洗ってラベルも剥がされ、やはり色別に分類されている。

「失敗作は、また種ガラスに混ぜて使う。割れたのや、気泡が入ったのや」私の視線に気づいたのか、おじいさんは先回りして説明してくれた。「瓶の方は色ガラスを作るときに少しだけ混ぜる」

「■■■■■ですね」

私が短くコメントすると、おじいさんはうるさげに手を振った。

「横文字はようわからん」

その口調と仕種が妙におかしくて、思わず笑ってしまった。そのとき、

「……お邪魔します」今さらのように挨拶をして、サヤさんがまた入ってきた。それからリュックからごそごそと丸い包みを取り出した。布で幾重にもくるまれた、ガラスのリングだった。「あの、これを直していただくことはできないかと思ひまして……」

おじいさんは受け取ったリングをじろりと見て、素っ気なく言った。

「割れたもんを元どおりになんてことはできないよ」

「あ……そうなんですか」

肩を落とすサヤさんを見て、おじいさんは面倒臭そうに付け加えた。

「まったくおんなじ物を作ることできない。ひとつひとつ手作りだからね。だが、似たようなもんなら作れる」

「そうですか」サヤさんの顔が輝いた。「それでは、お願いできますか？」

おじいさんは鼻からふんと息を漏らした。

「特注ってことになるから値が張るが、それでもいいかね？」

④ 「え、ええ」

サヤさんはにつこり笑ってうなずいた。ちくり、と胸が痛む。

そのとき、ベビーカーの上のユウ坊が、歩きたがってじたばた暴れ始めた。

「駄目よ、ユウスケ。ここは壊れ物がいっぱいだから、お外で歩きましょうね。照ちゃん、あなたの携帯電話の番号を伝えておいてね。完成したら、お電話頂くようにしておくといいわ」

それじゃお願いします、ともう一度言ってから、サヤさんは外に出ていった。

私は少し迷ってから、おじいさんに小声で言った。

「あの……すみません。さっきの注文、取り消します。リンゴが壊れたの、ほんとに私のせいなのに、サヤさんのせいじゃないのに……」

「サヤさんってのは、今の女の人かい？」

少し笑って、おじいさんが聞く。

「ええ。あの人、お人好しなんです。母子家庭で貧乏なのに、こんな高価なもの、弁償させるわけにはいかないんです。今、持っても仕方のないものだし……だからいいんです」

「……それを何で直接、あの人に言ってやらない？」

私は黙って、答えなかった。

「注文は無しにしておくよ。それでいいね」

私は無言のまま、こくりとうなずく。

「それからこれは、どうするね」

おじいさんは壊れたリンゴを顎で示した。

「……これを溶かして、また別なグラスとかコップとか、作れますか？」

「ああ、作れるよ」

Ⅲ こともなげに、おじいさんはうなずく。

「じゃ、使って下さい。お願いします」

おじいさんは私とリンゴを交互に見てから、

C

 言った。

「……良かったら、また来なさい」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。けれどとつさに、私は笑ったのだと思う。それと呼応するように、相手もまた、にこりと笑ったから。

たとおじいさんの言葉が、単なる社交辞令や気まぐれだったとしても。

それでもやっぱり、私は嬉しかったのだ。

外に出ると、五月の風がさわやかだった。

灼熱の炉の中で、水飴のように溶けていくリンゴのことを考えた。

壊れたガラスは、二度と元の姿にはならない。絶対に。けれど溶かして、別な物を作ることはできるのだ。

たとえ失敗して形がいびつになったり、気泡が入り込んだりしちゃっても。徐冷炉の中でひび割れたとしても。何度だつて。何百回だつて。⑤ 生まれ変われ、私のリンゴ。

心の中で、そう唱えながら。

私は向こうで手を振っている母子の方へ、ゆっくりと歩いていった。

(加納 朋子 作『てるてるあした』より)

※1 違い棚 …… 壁に取り付けられた、段違いの棚。

※2 吹きガラス …… 高温で溶かしたガラスを管の先に巻き付け、反対側から息を吹き込んで形を作るガラス細工のこと。

※3 一輪挿し …… 一、二輪の花を活けた小さな花瓶。

問一 ~~~~~ IⅢの意味として最も適当なものを、それぞれの後のアⅤエの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

I 殺風景

- ア 人が見たらどう思うか心配になる部屋
イ 何も物がなく見栄えのよくない雰囲気
ウ 物で窓の外が見えなくなっている状態
エ 物が何もなくて単調でつまらない様子

II にべもない

- ア 返事に何のためらいもない
イ 断るのにも全く抵抗がない
ウ 冷たい話し方で愛想がない
エ 少しも検討しようとしな

III こともなげに

- ア 難しくはないと自信をもって
イ 何でもないかのように平然と
ウ それほど深く考えることなく
エ これまでの経験から直感的に

問二

A

C

 に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のアⅤコの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-------|--------|--------|---------|---------|
| ア きんと | イ ぼとりと | ウ こくりと | エ がつしりと | オ しつかりと |
| カ ぴんと | キ ぼそりと | ク ことりと | ケ ゆつくりと | コ たつぷりと |

問三

--

 に体の一部を表す漢字一字を入れなさい。

問四 ■■■■にはカタカナが一字ずつ入ります。あてはまる言葉を答えなさい。

問五 _____ ①「そうだったのはむしろ、私の心だ」とありますが、この時の「私」の気持ちを説明しなさい。

問六 _____ ②「しばらくもじもじしていたが、やがて意を決したように中に入ってしまった」とありますが、この時のサヤさんの気持ちを説明しなさい。

問七 _____ ③「あるかもしれない未来の一パターンだ」とはどういうことでしょうか。具体的に説明しなさい。

問八 _____ ④『「え、ええ」サヤさんはにつこり笑ってうなずいた。ちくり、と胸が痛む」とありますが、この時のサヤさんと「私」の気持ちの説明として最も適当なものを、次のアⅤエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ガラスのリンゴの弁償として全く同じものを作ることはできないものの、似たものなら作れると聞いて喜ぶサヤさんを見て、「私」は本当は修理してほしかったのだがそれを言いだせなくなってしまい黙っている。

イ ガラスのリンゴの弁償のために、修理ができないならばせめて作り直しができると聞いて仕方なくお願いするサヤさんを見て、「私」は特別にお金がかかる作り直しではサヤさんの負担が大きすぎると心配している。

ウ ガラスのリンゴを本当は修理してほしかったのだが、修理ができないとわかってがっかりしながらも作り直しでかわないと言うサヤさんを見て、「私」はその気遣いを察して自分のためにありがたいと思っている。

エ ガラスのリンゴを作ってもらうのに出費が大きそうだと知らされ、痛手であると思いつつも責任感からお願いするサヤさんを見て、「私」は自分のためにサヤさんが無理をしていると感じて申し訳なく思っている。

問九 登場人物のうち、ガラス工場のおじいさんの人柄ひとがらの説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一見そつけないように見え、また言うべきことははっきり言うが、難しい言葉もわかるように説明してくれたり、「私」の心の内を察したかのような気遣いをしてくれる人。
- イ 仕事に集中すると誰かが来ても話しかけられるまで気づかない集中力を見せる一方、割れたガラスやワインボトルを見ている私に進んで説明してくれる人なつつこい一面もある人。
- ウ それほど話好きではない人のようだが、失敗したガラスのリサイクルに取り組んだり、サヤさんからのガラス細工の作成依頼をなしにすることを提案したりと多方面に積極的な人。
- エ 様々なガラス細工を自由に作れるほど器用な人だが、一方で商売としての作成依頼には対応がきびしく、お金がないと聞いたら即座に注文を取り下げるよう勧めるしつかりした人。

問十

- ⑤ 「生まれ変われ、私のリング」とありますが、この時の「私」の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

氏名受験番号

得 点

*